

リード芦屋新聞

発行元
芦屋市立活動センターあしや
記事
兵庫県立芦屋高等学校

中高生の活動後押し

高島市長「ともにまちをつくる仲間」

高島峻輔・芦屋市長のインタビュー第3弾は、教育への考えや「市長」を意識したきっかけに迫る。

◇ ◇

「中学生たちとの交流など積極的に「未来を担う世代」と関わる姿を新聞などで見ました。教育現場を見て感じた課題は何ですか。

「芦屋の中高生が、私たちの未来のこと、将来の芦屋についてとても関心を持っていて、とても感銘を受けました。一人一人が意見を持っていて、それを交換し合っているんです。その上であえて課題を挙げるなら、未来世代の声の形になら

る仕組みがまだない点ですかね。校則とか、タブレットの使い方とか。変えられるかは、個人任せになって

いる。でもそうした課題は、一緒になって解決できることだと思います」「ただし行政をお願いします



れば何でも解決する、とはなってほしくないと思っています。行政はあくまで活動する市民の後押しになりたい。行政の進める活動に参加してください、と市民を巻き込む形もあるとは思いますが、そうではなくて一人の市民、芦屋の未来と一緒に作る仲間として対等に後ろから応援したい。そのための環境を整えることに集中したいです」(写真は「あしや部」メンバーと語り合う高島市長)

実感した市の変化

「市長の仕事」意識した少年時代



「いつから市長としてまじづくりに関わりたいと考えていたんですか。」

「大阪の箕面で生まれ育ったんですが、小学校6年生のときに当時60歳代だった市長が、30歳代の人に代わりました。そうしたら、まちが変わったんですね。実際、子どもがとも増えたんです。まちが変わっていくんだ、と初めて実感しました」

「高校1年生のときにその市長と会うことができ、お話をしました。社会をよりよい方向に変えることができる仕事だと、初めて市長という仕事の面白さを実感したのがそのときです。でもそこから市長だけを指してきたわけではありません。そのときに自分がいかに面白そうだと思うこと、やりたいと思うことをしてきました」(写真は本紙記者と名刺交換する高島市長)